

# さじき女房御返事

建治三年五月二五日 五六歳

女人は水のごとし、うつは物にしたがう。女人は矢のごとし、弓につがはさる。女人はふねのごとし、かぢ楢のまかするによるべし。しかるに女人はを夫とこぬす人なれば女人ぬす人となる。を后とこ王なれば女人きさきとなる。を后とこ善人なれば女人仏になる。今生のみならず、後生もを后とこによるなり。しかるに兵衛ひょうえのさゑもんどの左衛門殿は法華經の行者なり。たとひいかなる事ありとも、を妻とこのめなれば、法華經の女人とこそ仏はしろしめされて候らん、又我とこ発ゝるをを發こして、法華經の御ために御帷かた贈びらをくりたびて候。

法華經の行者に二人あり。聖人は皮剥をはいで文字をうつす。凡夫はたゞ一ひとつ領着きて候かたびらなどを法華經の行者に供養すれば、皮取をはぐうちに仏をさめさせ給ふなり。此の人のかたびらは法華經の六万九千三百八十四の文字の仏進にまいらせさせ給ひぬれば、六万九千三百八十四のかたびらなり。又六万九千三百八十四の仏、一々六万九千三百八十四の文字なれば、此のかたびらも又かくのごとし。たとへば春はるの野の千里ばかりにくさ草のみち充て候はんに、すこしきの豆ばかりの火をくさひとつには放なちたれば、一時に無量無辺の火となる。このかた帷びらも又かくのごとし。一つのかたびらなれども法華經の一切の文字の仏奉にたてまつるべし。この功德は父母・祖父母乃至無辺の衆生にもをよぼしてん。まして我がいとを最しとを愛をも思ふとこ思ゝは申すに及ばずと、おぼしめすべし。恐々謹言。

五月廿五日

日 蓮 花 押

棧敷  
さじき女房御返事